

平成18年度 修士課程学位論文要旨

学位論文題名（注：学位論文題名が欧文の場合は和訳をつけること）

JMAP のスコアと日常の遊び内容からみた 健常幼児の発達的变化

学位の種類：修士（作業療法学）

保健科学研究科 作業療法学専攻 学籍番号：035302

氏名：木村 順

（指導教員名：山田 孝）

注：1,000 字程度（欧文の場合 300 ワード程度）で、本様式 1 枚（A4 版）に収めること

本研究は、近年の健常な幼児にも見られる落ち着きのなさや注意の散漫さ、衝動性といった問題を感覚統合のつまずきとしてとらえ、その背景を検討することである。そこで、都内や近隣の保育園児に「日本版ミラー幼児発達スクリーニング検査（以下、JMAP）」を実施した。対象児は JMAP の年齢区分に従い、5 歳 3 ヶ月～5 歳 8 ヶ月（VI 群）で 40 名、5 歳 9 ヶ月～6 歳 2 ヶ月（VII 群）で 48 名、計 88 名とした。なお、障害の診断が出ていたり障害枠で通っている幼児は除外した。また、施設長と現場の保育士、対象児の保護者には「遊び時間や生活内容」に関するアンケートを配布し回答を依頼した。

JMAP の結果からは、本検査が日本で標準化された 20 年前と比べ、前庭系と運動企画に関わる項目（片足立ち、点線引き、線上歩行、背臥位屈曲、人物画）で能力の低下が有意に認められた。また、今回の調査では、JMAP のスコア分析から、障害のリスクを疑わせるパターンを示す幼児が全体の 4 割におよび、その内、全般的な発達の未熟性を疑われるパターンⅢに該当する児が 13 名（14.8%）存在した。

現場の保育士は、問題を示す子どもたちが増加している実感を全員が認めており、より多くの保育士が増加していると答えた項目は、人の話しが聴けない、キレやすい、落ち着きがない、全身運動が不器用であるというものであった。JMAP の結果と子ども達の生活時間を検討した結果、起床時間が早い幼児と外遊び時間が多い幼児は、JMAP の総合点・基礎能力・協応性の得点が有意に高く、テレビやテレビゲームに関わる時間が長い幼児ほど低かった。さらに、パターンⅢに該当した 13 名は、他の児と比べて、保育園と自宅での週平均外遊び時間、自宅での週平均外遊び時間、自宅での土日の外遊び時間が有意に少なく、自宅での週平均テレビ・ビデオ・テレビゲーム時間が有意に多かった。

これらのことから、活発な外遊びが少なくなっていることが、子ども達の脳の発達を停滞させる要因になっており、健常な幼児にも感覚統合のつまずきが生じている可能性が示唆された。